

『花間集』 作品の解釈をめぐって

青山 宏

『花間集』を読んで、常々感じていることは、解釈上、問題を抱えた作品が大変多いということである。それは、一首全体の解釈にわたる場合もあれば、一語句に関わるものもある。一九五〇年代に入るまでは、『花間集』の注釈書は、わずかに李氷若の『花間集評注』と華連圃の『花間集注』のみであったが、一九五〇年代以降、多くの注釈書が続々と現れて、読解上、多大な便宜を受けることができるようになった。しかし、それで問題のすべてが解決されたわけではなく、なお多くの問題が残されたままになっている。

本稿では、二つの作品（温庭筠の〇三九南歌子、牛嶠の二六八菩薩蛮、一〇三九、一六八は『花間集』全五百首の通し番号）を取り上げ、注釈書によって解釈の異なる作品を、如何に読んだら良いかを検討する。卑見に対して、大方の教示が得られれば幸甚である。なお、本稿は平成十七年五月二十八日、宋代文学研究会で行った報告に手を入れたものである。当日の説明に一部誤りがあったので訂正しておいた。

論に入る前に、管見の及ぶ限りでの単刊の『花間集』の注釈書・校注本ならびに翻訳書を列挙し、併せて本稿で使用した略称を示しておく。

書名	著者	出版社	出版年	略称
① 『花間集評注』	李冰若	開明書店	一九三五	李冰若本
② 『花間集注』	華連圃	商務印書館	一九三七	華連圃本
③ 『花間集校』	李一氓	人民文学出版社	一九五八	李一氓本
④ 『花間集評注』	李冰若	樂知出版社	一九六〇	
(①の影印本)				
⑤ 全訳『花間集』	花崎采琰	桜楓社	一九七一	
⑥ 『宋紹興本花間集附校注』	楊家駱主編	鼎文書局	一九七四	
(紹興本、①・③の合刊本。紹興本はいわゆる晁謙之跋文本で、「捫北京図書館蔵宋紹興十八年刻影印本・一九五五年九月・文学古籍刊行社」本の影印である)				
⑦ 『花間集』	蕭継宗	台湾学生書局	一九七七	蕭継宗本
⑧ AMONG THE FLOWERS	Lois Fusek	COLUMBIA UNIVERSITY PRESE	一九八二	
⑨ 『花間集注』	華鍾彦	中州書画社	一九八三	華鍾彦本
(②の修訂本)				
⑩ 『花間集注釈』	李誼	四川文芸出版社	一九八六	李誼本

- ⑪ 『花間集』 陳慶煌 金楓出版有限公司 一九八七
 - ⑫ 『花間集新注』 沈祥源・傅生文 江西人民出版社 一九八七
 - ⑬ 『花間集全訳』 房開江注、崔黎民訳 貴州人民出版社 一九九七
 - ⑭ 『花間集』 朱恒夫注訳 三民書局 一九九八
 - ⑮ 『花間集評注』 李冰若 河北教育出版社 一九九九
 - ⑯ 『花間詞派選集』 王新霞 北京師範學院出版社 一九九九
- （『花間集』中より一二三首を選録、評・注を施す）
- ⑰ 『花間詞全集』 錢国蓮・項文惠等 当代世界出版社 二〇〇二
 - ⑱ 図文本『花間集』 李保民等注評 上海古籍出版社 二〇〇二

一、温庭筠の〇三九南歌子の解釈について

（作品の本文は、「扈北京図書館蔵宋紹興十八年刻影印本・一九五五年九月・文学古籍刊行社」本によった。牛嶠の「六八菩薩蛮も同じ。」）

卷一・温庭筠・〇三九南歌子

似帯如糸柳、团酥握雪花。簾捲玉鉤斜、九衢塵欲暮、逐香車。

初めに本詞に付けられた諸本の注・評・訳は以下の通りである。配列は出版年次にしたがった。ただし、華連

『花間集』作品の解釈をめぐって

圓本と華鍾彦本は、修訂以前と以後とで考えがどう変わったかが分かるように、並べて配列した。なお、注・評・訳は、注釈者の意図が分かるように、煩をいとわず全文を掲げることにした。

李氷若本

〔注〕 雨村詞話、団酥云花之白如団酥也。

〔校〕 団酥句、王本「酥」作「蘇」。

〔評〕 源出古樂府。詞弁

李一氓本

〔校〕 「団酥」、鄂本、毛本作「団蘇」、誤。

蕭繼宗本

〔音釈〕 ○簾、此処謂車簾也。

〔校記〕 団酥句、王本「酥」作「蘇」、非。

〔集評〕 源出古樂府。詞弁

〔宗按〕 似結未結、亦有余韻。

華連圃本

〔注〕 ○似帶如糸——皆以狀柳、言柳以喻美人腰也。○酥——石印本誤作蘇、今拋彊邨刊金奩集本改。団酥、猶凝脂也。宋人詞多有用之者。稼軒詞白牡丹、「最愛弄玉団酥、就中一朵、曾入揚州詠。」曾觀詞、「玉人今夜、滴粉搓酥、忒斂眉山。」即其例。雪花謂粉也。○爾雅、「四達謂之衢。」九衢、謂交道也。言捲簾所欲望者、婦人也。屬目九衢之中、車塵万丈、自晨至昏、而不見婦人。空逐香車馳過而已。

華鍾彦本

〔注〕○似帶如糸、皆以狀柳、言柳以喻美人腰也。○酥、石印本誤作蘇、今拋影印紹興十八年刻本改。团酥、猶凝脂也。宋人詞多有用之者。稼軒詞白牡丹、「最愛弄玉团酥、就中一朵、曾入揚州詠。」曾觀詞、「玉人今夜、滴粉搓酥、忒斂眉山。」一般指酥胸、此處指粉面。詩經碩人、「膚如凝脂」。握雪、猶言撲粉。花、指面容、白居易詩、雲鬢花顏金步搖。○爾雅、「四達謂之衢。」九衢、謂交道也。言捲簾所欲望者、婦人也。属目九衢之中、車塵万丈、自晨至昏、而不見婦人。空逐香車馳過而已。

李誼本

〔注〕○似帶句、柳条袅娜、似帶如糸、以喻美人之腰。杜甫《絕句漫興九首》、「隔戶楊柳弱嫋嫋、恰似十五女兒腰。」○团酥、《雨村詞話》卷一、「温庭筠《南歌子》、『团酥握雪花。』言花之白如团蘇也、与酥同義。」此處繫指美人之面。○九衢兩句、謂閨人望尽樓前路、不見人歸、唯有双眼逐香車。九衢(九)、四通八達之道。《楚辭·天問》、「靡萍九衢、臯華安居。」《三輔黃圖》卷之一引《輔決錄》、「長安城面三門、四面十二門、皆通達九達、以相經緯。」宋之問《長安道》、「樓閣九衢春。」香車、貴人所乘之車。秦韜玉《天街》、「香車爭碾古今塵。」

沈祥源本

〔校〕团酥、鄂、毛、王三本、「酥」作「蘇」、誤。

〔注〕○似帶句——意思是女子的腰、好像柳一樣苗条。拋《南歌子》首句一般的語法結構、「似帶」、「如糸」都是形容柳的、即像帶子像糸線一般的垂柳。這裏以柳代女子之腰。○团酥句——写女子的手臉白嫩、如雪如酥。酥、凝固的油脂、形容豐潤柔嫩。握雪花、形容手上也着脂粉、如握雪花之潔白。○簾捲句——玉鉤斜挂捲簾。○

九衢二句——意思是繁華的道路口來來往往的車馬、灰塵弥漫。時臨暮色、男子的心、還留連着那輛華麗的車子。衢（qú，渠）、四通八達的道路口。《爾雅》、「四達謂之衢。」香車、華貴的車馬。盧照鄰《長安古意》、「長安大道連狹斜、青牛白馬七香車。」七香車就是多種香料塗飾的華貴車子。

「析」這首詞是寫男子對女子的追慕。「似帶如糸」、「团酥雪花」、是男子所見到的女子的美麗形象、即形如柳糸輕盈婀娜、色如雪花豐潤光潔。「簾捲玉鉤斜」等三句、寫男子對女子的傾慕之情。他見到女子乘坐着華麗的車子、車簾捲起、玉鉤斜懸、在繁華的道路上駛過、他留連忘歸、時近暮色、他的心、還追逐着遠去的香車。短短五句、寫尽了纏綿繾綣之情。

房開江本

「題解」這首詞是寫男主人公對女子的追慕痴情。前兩句、從主人公的視角展現女子的體態容貌。其中比喻的運用、使她的美容美態更為形象動人、為後面寫他的痴情作了鋪墊。而「簾捲」句則將主人公的視角與她的形象關聯在一起、引發出主人公的情和愛。末二句、寫暮色降臨、他還追逐香車不舍、八個字写出了主人公的一片痴情。全詞二十三個字、把一個痴情男子写得活靈活現。他痴情地愛她、却并無輕浮的行為。他「逐香車」、却并無狂放之舉。看來、作者對主人公相思的描述是能把分寸的。

「注釈」○「似帶」句、謂女子腰細、身材苗條、有如帶子、糸線一般的垂柳。○「团酥、猶凝脂。又、鄂本、毛本作「团蘇」、誤。握雪花、形容女子手上的脂粉有似握雪花那樣潔白。○「簾捲」句、謂女子捲簾斜挂玉鉤之上。○九衢、四通八達的道路。《爾雅·积宮》、「四達謂之衢。」○香車、以香料塗飾的華貴車子。

「今訳」她的纖腰如嫩柳般婀娜、白白的双手彷彿握着一团雪。当玉鉤捲起車簾露出她的情影、我便在她的車後緊跟不舍。随着車輪揚起的香塵、踏遍了京城大街、一直走進黃昏的暮色。

朱恒夫本

「注釈」○似帶如糸柳、喻美人之腰如帶子、柳枝那樣細。杜甫〈絕句漫興九首〉、「隔戶楊柳弱嫋嫋、恰似十五女兒腰。」○团酥、猶凝脂、這裏指粉面。辛棄疾〈白牡丹〉「最愛弄玉团酥、就中一朵、曾入揚州詠。」《雨邨詞話》卷一、「温庭筠《南歌子》、『团酥握雪花。』言花之白如团蘇也、与酥同義。」○九衢、指四通八達之道。《楚辭·天問》、「靡萍九衢、泉華安居。」○香車、美人所乘之車。一說為所思男子之車。秦韜玉《天街》、「香車争碾古今塵。」

「語訳」香車裏面一嬌娃、腰細如柳面如花。滿身風流讓人愛、漂亮絕頂、猶如一幅美人画。錦繡簾幕玉鉤掛、温和端莊目不斜。衆車往來揚塵土、暮色雖起、我追香車不還家。

「賞析」愛情是古今中外不衰的文学主題、也是許多人追求的精神對象。然而、愛情是什麼。始終是一個令人困惑的問題、有人說有了共同的思想旨趣、就能產生愛情。也有人說、愛情要有物質的基礎。更有人說、能使人心搖蕩、並使對方娛悅的東西、就是愛情、然而它說不清、道不明、只可意會、不可言傳。這些陳述都不全面、而且很重要的一点沒有說、就是容貌与風度、就大多數人而言、「色」是燃起愛情之火的導火線、是維持愛情之膠合劑。有共同的思想旨趣、而沒有容貌与風度、可能會成為朋友而不一定成為恋人。有優裕的物質条件、可能會得到称心如意的男子或女子、但一旦錢少了、對方的愛情之火也就隨之熄滅了。這種愛不是真正的愛情、僅是一種商業式的愛。總之、容貌与風度是產生愛情的重要条件。我們称讚《西廂記》中的張生与鶯鶯的愛情、其實、他們相愛就是因為男子俊俏、女子漂亮。這首詞所描写的就是一对青年男女邂逅相遇時所產生的愛情。「似帶如糸柳、团酥握雪花、簾捲玉鉤斜。」由詞的内容、我們可以作具体的想像。一位青年男子在路上遇見了一位乘車的女子、因女子掀起車簾、使男子看到了她的容貌、她的腰束了起来、如帶似柳、細細的、柔弱的。她的肌膚如

凝脂一般、光滑玉潤。她的臉龐、如雪一樣晶瑩。他的心裏立即激起了波瀾、多麼漂亮的姑娘啊。你正是我所追求的。他這時一定是目不轉睛地望著車中的女子、這是男子的態度。那麼、女子呢。俗話說「一個巴掌拍不響」、愛情是男女双方的事情、只是一方主動而另一方無動於衷、或者是另一方對他的主動表示厭惡、就不会產生火熱的愛情。這位女子的態度是鮮明的、她對他也是一見鍾情。她可能從窗子的縫隙中看到了男子、為他的俊雅風流所吸引、看著看著、她竟情不自禁地掀起了簾子。如果不鍾情於男子、何以會捲起簾子而拋頭露面。要知道、在那札教森嚴的社會裏、三尺男童都不准進入閨房的呀。她捲起簾子、一方面要細看郎君、另一方面也是為了讓郎君注意到自己。她這時一定是「巧笑倩兮、美目盼兮」。男子完全被她的美貌與多情征服了、他的心裏燃起了愛情的火焰、產生了一股強大的力量、他決定排除萬難、去追求這一美好的愛情、於是、跟著香車、一步一隨、暮色雖已降臨、路上塵土飛揚、也不改變主意、他要弄清楚姑娘的居處。此詞所寫的內容是有生活的影子的、相傳唐代詩人韓翃同府尹之女柳眉兒相遇於途。韓騎馬上、柳坐車中、四目相對、竟一見鍾情。柳眉兒暗贈韓開元通寶金錢、韓尾隨到她家、府尹發現金錢、欲加吊打、後由李白奉旨作媒而締結婚姻。此傳說後編為元雜劇劇本《李太白匹配金錢記》。

錢國蓮本

〔注〕○似帶——此喻美人之腰。○團酥——此喻美人之面。○香車——貴人所乘之車。

李保民本

〔注〕○「似帶」句——形容腰細如柳。○「團酥」句——形容肌膚雪白。○玉鉤——新月。○九衢——四通八達的道路。

〔評〕盡頭語、單調中重筆、五代後絕響。譚獻評《詞弁》

這兩首詞分別寫少女對意中人的一往情深和少年被少女的美貌深深吸引。兩者共同的特点是辭藻艷麗不流於堆

砌、雕飾精細不失於媚俗、感情率直不趨於淺薄。無論是少女「不如從嫁与、作鴛鴦」的心声袒露、還是少年「九衢塵欲暮、逐香車」的行為写照、都體現出男女主人公對美好愛情的熱烈而又執着的追求、饒有樂府遺風。（青山注、這兩首詞と言っているのは、〇三八南歌子と合わせて批評していることによる。）

本詞が何を歌ったものかについては、大きく意見が三つに分かれる。第一は、男の帰りを待ちわびる女性を歌ったとするもので、この解釈をとるのは、華連圃本（修訂本も同じ）、李誼本である。第二は、街で見かけた車中の女に対する男の思慕の情を歌ったとするもので、この解釈をとるのは、沈祥源本、房開江本、朱恒夫本、李保民本である。作中の主人公が、女か男かで解釈がまつたく相反している。右以外の注釈書は全体の解釈には触れず、語句の説明のみに止まるが、その語句の解釈から、ある程度の推測のつくものもある。例えば、蕭繼宗本は「簾」について「車簾」としているところからすると、第二の解釈に立っているものと思われる。第三の解釈は、柳を歌ったとするものである。李冰若本は、『雨村詞話』を引いて、「団酥云花之白如団酥也」と言っているところからすると、この「花」は、「楊花」つまり「柳絮」のことと解しているように思われる。この解釈に連なるものとして、『花間集』の注釈書ではないが、張紅・張華編『温庭筠詞新釈輯評』（中国書店・二〇〇三年三月・北京）が引くところの、丁寿田・丁亦飛《唐五代四大名家詞》の「此詞言暮春傍晚、捲簾眺望、則見柳絮成団、車塵漠漠、所謂城市之光也」という見解がある。

こうした三つの解釈のうち、果してどれが正しいのであろうか。そこで、作品の第一句から順次、それぞれの句が何を言っているのかの検討を通して考えてみたい。

(1) 「似帯如糸柳」について

華連圃本は「皆以状柳、言柳以喻美人腰也」と説明する（修訂本も同じ）。確かに、しなやかな柳の枝を借りて美女のなやかなほっそりとした腰を形容する言い方は、枚挙するいとまのないほど多用されており、時には、逆に女性の腰を借りて、しなやかな柳を形容する場合もあることを思えば、この解釈は一見、通ずるかのようと思われる。しかし、虚心に読めば、この解釈は唐突の感を免れない。恐らくは、そのためであるう、華連圃本は、「皆以状柳」と言った上で、はじめて「言柳以喻美人腰也」と述べている。また、沈祥源本も、「意思是女子的腰、好像柳一樣苗条」と、華連圃本と同様の解釈を示した上で、「挹《南歌子》首句一般的語法結構、『似帯』、『如糸』、都是形容柳的、即像帶子像糸線一般的垂柳」と断り、改めて「這裏以柳代女子之腰」と説明している。このことは、この句が「帯のような糸のような柳」ということを言ったものと見るのが、自然な理解であることを示している。この句を女性の腰を形容したとするものには、ほかに錢国蓮本、李保民本などがあるが、こうした屈折した解釈は無理が伴わざるをえない。

(2) 「団酥握雪花」について

華連圃本は、辛棄疾の白牡丹を歌った詞（念奴嬌）を例に引いて、宋词には「団酥」の語はたくさん使われているとし、「団酥、猶凝脂也」と注しており、「雪花」は白粉であるとしている。しかし、修訂本である華鍾彦本は、「握雪花」を「握雪」と区切り、「握雪」は「撲粉」（白粉をパフで叩くこと）と、「花」については、「面容」（顔）を指すことと解釈を改めている。「花」も美女の顔を言うことばとして広く用いられており、この解釈も通ずるかに見える。沈祥源本は、この一句は、女性のしなやかな手や顔が雪や酥（凝脂）のように白いことを言ったものであるとした上で、「握雪花」は、「形容手也着脂粉、如握雪花之潔白」（手の甲にもクリーム状の白粉が

塗られていて、真っ白な雪片（空からひらひらと舞い降りてくる雪）を握ったかのようなさまを形容したものと説明している。沈祥源本が顔だけでなく手にもと言っているのは、「握」が手の動作であることによつていようが、握るという動作は掌の内に握ることであり、これを手上（手の甲）と結び付けるのは無理があると言わざるをえない。李誼本も華鍾彦本に近い見解をとり、朱恒夫本も、前句と合わせて「腰細如柳面如花」と訳し、華鍾彦本に近い解釈をとっている。房開江本は、顔は含めず、ただ手の甲に白粉が塗られていることと、手に限定した解釈をとっている。李保民本は「团酥」は美人の顔を形容したものとやっているが、「握雪花」については何も説明は加えていない。このように解釈がまちまちであると、どの解釈にしたがうべきか迷うところであるが、少しでも無理のあるものは排除するかたちで、正解に近づく以外にないであろう。この一句を女性の化粧に結び付ける解釈は、第一句を女性の腰を形容したものとするとところから導き出されたもので、第一句の解釈を変えて見ればどうなるか、検討してみる必要がある。そこで、第一句を枝垂れ柳を言ったものと解してみると、本句は、「丸い酥のような固まりは雪の片を握ったかのように」となり、柳絮を言ったものであることが理解される。これは、後の句から知れるところであるが、柳の絮が風に吹かれて路上を転がってゆくうちに寄り集まって、手の内に入るほどの大きさになったことを言っているのである。その点、先の丁寿田・丁亦飛の『唐五代四大家詞』の「柳絮成团」の見解は正鵠を射たものといえることができる。

(3) 「簾捲玉鉤斜」について

この句の意味は、「簾を巻いて斜めに玉製の鉤に掛ける」ということであるが、これはもちろん人の動作である。一、二句が柳を言ったものとすると、ここ第三句にきて人の動作が突然現れるのはやや唐突の感を覚えざるをえない。もし、一、二句が人について言ったものであれば、この唐突感はなくなる。そこで多くの注釈書が、

一、二句を人に結び付けて美女を形容したものと、二つに意見が分かれる。男の帰りを待つ女を歌ったとするものは、部屋の窓に掛かっていたものというふうになる。街で見かけた車中の女を思慕する男の情を歌ったとするものは、当然のことながら車に掛かっていたものとする。後者は、その「簾」を車中の女性が巻き上げたものとし、男がその姿を認めて、心惹かれたものとしている。蕭繼宗本が「簾」を「車簾」としているのも、これと同じ解釈をしていることが分かる。詞においては、句の排列は、時間の系列にしたがって、現象の発生順に記述されるとは限らず、後からの現象が、先に起こった現象に先立って記述されるという例がしばしば見られる。例えば、牛嶠の一六八菩薩蛮にもその例が見られる。後者の解釈はその例に当たる。この後者の解釈が無理なものであることは後に述べるが、一、二句を柳を描写したものとする場合も、この例に当たり、窓のカーテンを巻き上げて街の大通りを眺めると、枝垂れた柳が風に揺れ、柳の絮が丸くなって転げてゆく光景が目に入ったということになる。では「簾」を斜めに巻き上げて「鉤」に止めるということは、具体的にどのような掛け方を指すのであろうか。今日、多く見られる横引きに開閉するカーテンでは、カーテンの下端だけを引き寄せて、上下の中間の部分止めバンドで抑えて、左右のカーテンが八の字型に開いたように止める止め方がある。巻き上げ型の場合は、窓の上端の左右に止鉤がついていて、一枚カーテンの場合であれば、カーテンの左下を右側の鉤に、あるいは、カーテンの右下を左の鉤に掛ければ、カーテンは斜めに巻き上げられることになる。カーテンが左右二枚に分かれている場合も同じである。本詞の「簾捲玉鉤斜」はまさにこの場合に相当する。しかし、ここで見落とすことできないのは、李保民本の解釈である。李保民本だけは、他の解釈と異なって、「玉鉤」を「新月」と解している。「簾」を巻き上げたら、空に新月が斜めに掛かっていたというものである。

『花間集』には、「鉤」の文字は、本例を含めて全部で六例出てくる。以下がそれである。

- (一) 玉鉤褰翠幕（温庭筠・〇〇五菩薩蛮）
- (二) 簾捲玉鉤斜（温庭筠・〇三九南歌子）
- (三) 偏能鉤引淚闌干（薛昭蘊・一四〇離別難）
- (四) 鉤垂一面簾（孫光憲・三五二菩薩蛮）
- (五) 映簾懸玉鉤（毛熙震・四四四更漏子）（新月上、薄雲収、映簾懸玉鉤）
- (六) 鉤翠箔（毛熙震・四五五木蘭花）

この六例中、「玉鉤」の語は、本例を含めて三例見られる。そのうち、「玉鉤」が明らかに月を示すのは（五）の例で、窓の「簾」に三日月の影が映っていることを言ったものである。残る一例は、〇三九南歌子の作者温庭筠の菩薩蛮に見えるもので、これは「杏花含露团香雪、緑楊陌上多離別。灯在月朧明、覺來聞曉鶯。玉鉤褰翠幕、粧淺旧眉薄。春夢正闌情、鏡中蟬鬢輕」という文脈の中で使用されている。作品全体の意味は、「杏の花は露を含んでまるで香しい雪の毬のように、道の辺の柳青めばまた別れの季節。灯火は朧にさす月の光に影淡く、目覚めては聞く明けの鶯の声。玉の鉤に翠の帳を掲げれば、夕べの粧よすがいくずれて眉は色褪せ、春見る夢は正にかの人の夢、鏡に映るは鬢のほつれ毛。」というもので、明け方、愛する男の夢から醒めた女は、窓の帳を巻き上げて鉤に掛け、室内を明るくして、くずれた昨夜の寝化粧の跡をととのえようと鏡に向かったものであることが知れる。したがって本詞の「玉鉤」も「簾」を止めるための「鉤」である可能性が高い。（三）は「簾」には

関係なく、「ただはらはらと流れ落ちる涙をさそう」ことを言ったものにすぎない。(四)も「簾」を「鉤」に掛けることを言ったものである。「玉鉤」を新月と解した李保民本は、恐らく(五)の用例を念頭に置いたものではないかと思われる。本稿では、後の「まとめ」で述べるように、本詞を柳を歌ったものと考えるが、李保民本の解釈にしたがった場合、そこからどういことが導かれるのか、一応検討しておくことにする。本詞に歌われている時は、柳絮の舞う春の日暮れ、新月が斜めに空に掛かるころである。温庭筠の生年は順宗の永貞十三年(八一八)で、没年は懿宗の咸通元年(八七〇)であること、『花間集』に収められる温庭筠の作品の内容を考えると、本詞が作られたのは、二十代後半以降と見てさしつかえないであろう。作られた場所は、「九衢」や「香車」の語、温庭筠が都長安にいたことがあるなどからして、長安と見てよいであろう。長安の地理上の位置は、およそ東経一〇九度、北緯三四度一五分である。新月には幾つかの意味があるが、ここは「鉤」型の月を「玉鉤」になぞらえているので、三日月を中心とした月齢二日から四日ころの月を指すものと考えられる。また、斜めに掛かるについては、月が垂直でも水平でもなく、文字通り斜めに傾いて空に掛かっている場合と、空の真上近くでもなく、また地平線近くでもなく、高度三十度から五十度近くの空に掛かっている場合とが考えられるが、斜陽がすでに西に傾いた日を指すように、「玉鉤斜」の場合も同様の状況が考えられる。これらの条件が満たされるのは何月何日ころなのか。

まず長安(今の西安)における柳絮の飛び初めの時期は、観測年数六年の平均が今の暦で四月二十日、最盛期が四月二十九日となっている(宛敏渭編『中国自然暦選』三、各地自然暦、(二十)陝西省西安地区的四季劃別与自然暦。三三七三ページ—三七四ページ・科学出版社・一九八六年六月・北京)。また宛敏渭編『中国動植物物候図集』(木本植物、垂柳葉芽開始膨大期(中略)種子脱落開始期、種子脱落末期。三八ページ—三九ページ・氣象出版社・一九八六年六月・北京)では一九六

三年から一九八四年までの統計で、絮の飛び始めが四月二十日、末期が四月三十日になっている。現在と温庭筠の時代とは、気象条件は必ずしも同じとは言えないが、ここでは、しばらく当時も今も同じと見なしておく。また、ある地点における日の出や日の入り、月の出や月の入りは、その地の標高と関係するが、ここでは長安の標高は約三〇〇メートルである。以上を条件に調べると、以下のような結果が得られる（使用ソフトは、「ステラナビゲーター・一九九七年一〇月・アスキー」による）。年月日は西暦で今日の暦による。年齢は温庭筠の満年齢を示す。

西暦年月日	年齢	時刻	月の方角	月の高度	月齢	日の入り
八四七年四月二三日	二九歳	一八時一七分	西一〇度南	五二度	二、三	一八時二二分
八五五年四月二三日	三七歳	一八時〇一分	西七度北	四〇度	二、九	一八時二四分
同右 二四日	同右	一八時三九分	西三度北	四二度	三、九	一八時二四分
同右 二五日	同右	一八時三八分	西四度南	五三度	四、九	一八時二五分
八五八年四月二〇日	四〇歳	一八時二六分	西二度北	三四度	二、六	一八時二一分

同右 二〇日	同右	一八時三七分	西三度北	四八度	四、三	一八時二二分
八六九年四月一九日	五一歳	一八時一九分	西七度北	三八度	三、三	一八時二一分
同右 三〇日	同右	一八時二七分	西二度北	四八度	三、六	一八時三〇分
八六八年四月二九日	五〇歳	一八時二五分	西八度北	三六度	二、六	一八時二九分
同右 二七日	同右	一八時五一分	西七度北	四〇度	五、三	一八時二四分
同右 二六日	同右	一八時四九分	西五度南	三八度	四、三	一八時二六分
八六三年四月二五日	四五歳	一八時三二分	西	三二度	三、三	一八時二五分
同右 二一日	同右	一八時二八分	西七度南	四七度	三、六	一八時二二分

「玉鉤」がもし新月であれば、この南歌子が作られたのは、右の表に見るように、温庭筠が満二九、三七、四〇、四五、五〇、五一歳のいずれかの歳のときで、しかも都長安にいたときということになる。ここで、断っておかねばならないのは、李保民本は柳腰の女を慕う男を歌ったとする解釈をとっているので、この結果は李保民

本の解釈には適用できないことである。

(4) 「九衢塵欲暮」について

この句はほとんど問題は無い。「土埃の舞い上がる街の大通りは暮れかかる」ということを言ったものである。強いて言えば、この「塵」は、街路を走り去る車の車輪や、車を引く馬などの足元から舞い立つ土埃を言ったものである。

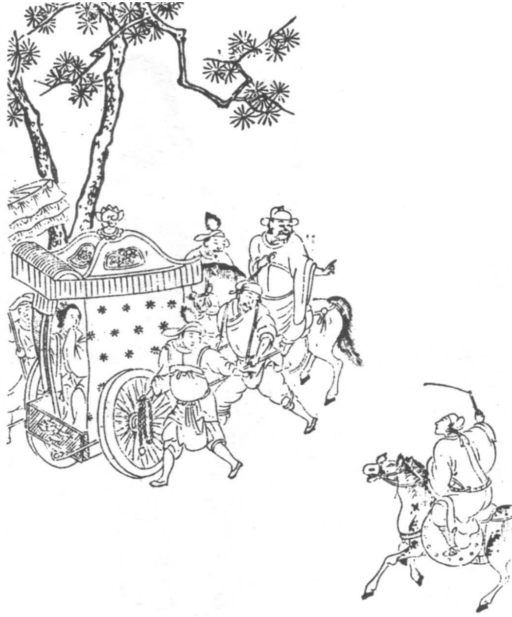
(5) 「逐香車」について

華連圃本は、女は、旅に出た男の車ではないかと期待して眺めるが、それは女が待つ男の車ではなく、別人の車で、女は空しくその車の後を目で追うの意に解している。旅に出た男と言ったのは、華連圃本が「自晨至昏、而不見婦人」と言っていることによる。当日、男が外出したのであれば、「自晨至昏」とは言わないからである。修訂本である華鍾彦本もこの見解は変えていない。この解釈に立つものは、先に触れたように李誼本であるが、他はいずれもが、香車を追うのは男であるとする。それは「香車」がしばしば婦人の乗る車を意味することによっている。しかし、「香車」が常に女性の乗る車だけを指すとは限らない。例えば、時代は下がるが、宋の歐陽脩の蝶恋花詞（幾日行雲何処去）の「香車繫在誰家樹」は、「かの人はいったい車をどこの家の樹に繋ぎ止めているのか」と、遊びに出かけたまま帰らぬ男の帰りを待つ女の言葉として歌われている。本詞を柳を歌ったものとする丁寿田・丁亦飛の『唐五代四大名家詞』は、この句については、明確な説明は加えていない。ただし、「捲簾眺望、則見柳絮成团、車塵漠漠、所謂城市之光也」の語からすると、はしりさる車の後を追うのは、柳絮や土埃と考えていたものと思われる。

まとめ

ここで、作品全体の解釈の検討に移るが、斜めに巻き上げた「簾」からのぞいた女の姿を見た男が、女に心惹かれたことを歌ったとする説は、「香車」が必ずしも女専用の車を指すとは限らないというほかに、どんな難点があるかと言えば、車の「簾」は、先ず、車の左右の窓に掛かっていたという場合が考えられる。この場合は、「清明上河図」などに描かれた車などからすると、車輪が大きく、窓は小さいために、「簾」を斜めに巻き上げた状態では、女の体が柳腰と判断できるほどにその姿を認めることは殆ど不可能である。しかも、腰掛けて乗車していたとかがえられる。もし、座席が車の側面より設けられ、窓に背を向ける形で腰掛けていたとすれば、斜め後ろを向いて手を伸ばし、「簾」を鉤に止めたと考えられるから、なおのこと、柳腰と認めるのは困難となる。もし、座席が進行方向に向かって腰掛けるようになっていたとしても、走っている車の中で立ち上がって「簾」を巻き上げることは考えられず、腰掛けたまま、左右いずれかの窓の「簾」に手を伸ばして巻き上げたに違いなから、この場合も柳腰と判断するのは不可能と言ってよい。では、「簾」が車の後部、ないしは前部に掛かっていた場合はどうかであろうか。この場合は「簾」の中は、車の巾一杯に設けることが可能で、全面的に「簾」を巻き上げれば、一見、女性の全身を見得る可能性があるように思われるが、もし、前部の場合であれば、「簾」の前には御者がいたのであるうし、更に車を引く馬や牛、あるいは驢馬がいたのであるうから、座席の向きがどうであれ、座席に掛けたままの女性が手を伸ばして「簾」を巻き上げたとしても、左右に設けられた窓の場合同様、全身を認知することは困難と言わざるをえない。仮に、後部の場合であっても、前部のように御者や馬、あるいは牛などによる障害はないにしても、腰掛けたままの女性が横向き、ないしは後ろ向きに手を伸ばして斜めに「簾」を巻くときに、柳腰と判断はできなかつたと考えるのか穏当である。李保民本は、書名に「図文本」と冠するように、

一首ごとに挿絵が入っている。左図がそれであるが、この絵は李保民本の解釈に合わせて描かれたものであるから、この図をもって、車中の女が「簾」を巻き上げた証拠とすることはできない。この図では車は手押し車になってゐる。朱恒夫本は、「二位青年男子在路上遇見了一位乘車的女子、因女子掀起車簾、使男子看到了她的容貌、她的腰束了起来、如带似柳、細細的、柔弱的」と言い、さらにその理由として、「她可能從窓子縫隙中看到了男子、為他的俊雅風流所吸引、看著看著、她竟情不自禁地掀起了簾子。如果不鍾情於男子、何以會捲起簾子而拋頭露面。要知道、在那札教森嚴的社会裏、三尺男童都不准進入閨房的呀。她捲起簾子、一方面要細看郎君、另一方面也是為了讓郎君注意到自己」という説明を加えている。しかし、止まっている車ならばいざ知らず、走っている車では、これまで述べてきた理由から、こうした解釈は成り立たないと言つてよい。車を走っている車としてきたのは、「九衢塵欲暮」の句による。大通りに土埃が舞う光景は走る車にこそふさわしいからである。ここでもう一度、「団酥握雪花」について考えてみよう。「団酥は丸く白いかたまりを言ったもので、「握雪花」は、その大きさが手で握つたほどであることを言つたものである。したがつて、「団酥握雪花」の句が美人の顔を形容したとするには、大きさ



が不適當であり、「握雪花」を、顔に白粉をはいたり、手の甲に塗ったりとする解釈も先述のように採用するわけにはいかない。

それでは、「柳絮」が車の後を追いかけて行くのを、「簾」を斜めに巻き上げて街路を眺めているのは誰なのか。それは、散る柳の絮とともに去ってゆく春を惜しむ女性であるに違いない。時が柳絮の舞う春の日暮れであるのは、今日もまた一日が過ぎ、ともに春を楽しむ人もないままに、こうして今年の春もまた過ぎ去ろうとしているという傷惜春の情が託されていると見てよい。華連圃本が第一、二句を美人を形容したものと解釈したのも、窓から眺めているのは女性であることを、敏感に感知したからと思われる。

以上の所論より、以下に、本詞の拙訳を示しておく。

帯のよな糸のよな枝垂れ柳、雪を丸めたよな白い絮。簾斜めに巻き上げ眺むれば、土埃舞う都大路は暮れかかり、柳の絮は走り去る車の後を追う。

二、牛嶠の一六八菩薩蛮の解釈について

卷四・一六八菩薩蛮

画屏重疊巫陽翠、楚神尚有行雲意。朝暮幾般心、向他情謾深。風流今古隔、虚作瞿塘客。山月照山花、夢迴灯影斜。

李冰若本

〔注〕○地理志、瞿塘為三峽之首。兩岸對峙、中貫一江。

〔評〕牛嶠菩薩蠻山月照山花、夢迴灯影斜。女冠子繡帶芙蓉帳、金釵芍藥花、皆佳句也。十国春秋。

李一氓本

〔校〕「照山花」、玄本作「絕山花」、誤。

蕭繼宗本

〔音釈〕○巫陽、謂巫山。「白居易、登白狗峽次黄牛峽登高寺却望忠州詩」巴曲春全尽、巫陽雨半收。○瞿塘

一峽名、三峽之一、一名広溪峽。在四川省奉節県東南長江中。兩岸峻壁高峙、江水怒激、溪口灩澦堆、矗立江

心、勢甚險惡、全蜀江路、以此為門戸。

〔集評〕牛嶠菩薩蠻山月照山花、夢迴灯影斜、女冠子繡帶芙蓉帳、金釵芍藥花、皆佳句也。十国春秋。

〔宗按〕前半風刺語。「朝暮」二字、独作別解。「山月」二句、信是佳句。「繡帶」一聯、則近於俗。湯頭祖

謂為六朝麗句、恐未必然。

華連圃本

〔注〕○画屏重疊一見一卷菩薩蠻注。巫陽、巫山之陽也。見二卷帰国遥注。○(青山注、向他句)、其心易式、故

不宜以深情相向也。○瞿塘、峽名、在四川奉節県東十三里。又名広溪峽、為長江三峽之首。李益江南曲、「嫁

得瞿塘賈、朝朝誤妾期。」是也。

華鍾彦本

〔注〕○画屏重疊、見一卷菩薩蠻注。巫陽、巫山之陽也。見二卷帰国遥注。○其心易式、故不宜以深情相向也。

○瞿塘—峽名，在四川奉節縣東十三里。又名廣溪峽，為長江三峽之首。李益《江南曲》：「嫁得瞿塘賈，朝朝誤妾期。」是也。

李誼本

〔注〕○巫陽、巫山之陽。用楚王高唐夢神女事。宋玉《高唐賦序》：「神女去而辭曰：『妾在巫山之陽，高丘乃阻。』」呂岩《偶仙橋》：「不作巫陽雲雨夢，却尋仙侶到蘭橋。」○楚神句，謂楚神尚有合歡之情意。亦借巫山神女而言。○朝暮兩句，謂楚王用志不專，神女不該以深情屬之。○風流、王仁裕《開元天寶遺事》卷上：「長安有平康坊，妓女所居之地。京師俠少，萃集於此。兼每年新進士以紅箋名紙，遊謁其中，時人謂此坊為風流蕪汜。」今古隔，言楚王夢神女事已很遙遠。○瞿塘、峽名。為長江三峽之首也。《杜詩詳注》卷十《所思》：「故凭錦水將双淚，好過瞿塘去灩澦堆。」注引《荊州記》：「灩澦如馬，瞿塘莫下，灩澦如象，瞿塘莫上。」瞿塘峽，在夔州。峽口有灩澦石。「李益《江南曲》：「嫁得瞿塘客，朝朝誤妾期。」○夢回、猶夢醒。南唐中主《浣溪沙》（舊香銷翠葉殘）：「細雨夢回鷄塞遠。」灯影、灯光之影。杜甫《大雲寺贊公房》：「灯影照無睡。」沈祥源本

〔校〕情漫深—晁本、索引本作「情謾深」。○山月照—玄本作「山月絕」、誤。

〔注〕○巫陽—指巫山。○楚神—指巫山神女，宋玉《高唐賦序》言楚王夢與神女相會高唐，神女自謂：「且為行雲，暮為行雨。」見韋莊《掃宮遙》「其三」注。這裏用此典故是說，神仙還有兒女之情，何況人世間呢。○漫—徒然，枉然。杜甫《賓至》：「豈有文章驚海內，漫勞車馬駐江干。」羅隱《始皇陵》詩：「六國英雄漫多事，到頭徐福是男兒。」可見「漫」作「空」、「枉」解副詞，也可寫作「謾」。○瞿塘—長江三峽之一，在四川奉節縣東十三里地。李益《江南曲》：「嫁得瞿塘賈，朝朝誤妾期。早知潮有信，嫁與弄潮兒。」○夢回、夢

醒。

「析」這首詞寫女子的夢境和夢後的心理活動。詞的夢境并未写明、但由「巫陽」、「楚神」、「行雲」、「朝暮」這些詞、可知為男女歡合之事。夢後女主人公又認為男子情意不可捉摸、行踪無定、如今、自己不可虛許了瞿塘客、這些都從側面反映了女子心靈的創傷。最後兩句寫室內灯影姍姍、室外山月通明、山花灼灼、襯托出女主人公孤苦的处境。

房開江本

「題解」此詞寫女主人公的怨情。上片、從巫山神女故事寫起。神女之於巫山、朝雲暮雨、情意纏綿、然女主人公自比神女、所對的却只是画屏上的巫山、只有「朝暮幾般心」、但一個「謾」字却透露了閨怨的無限酸楚、其間對神女的羨慕、對自身的哀怨。對愛的向往、對愛的自悔、多重含意一筆道出、手法極其巧妙。下片、直寫怨情、從古今不同、人神不同的感嘆起句、抒發了自己猶瞿塘商客之妻一樣的遭遇、獨守空閨的怨恨。末二句寫夢後所見的淒涼景色、以景結情、与上片反襯、把怨恨之情又推進一層。

「注釈」○「画屏」二句、以巫山神女故事、言主人公之多情。巫陽、巫山之陽、指巫山神女。楚神、亦指巫山神女。事見前韋莊《歸國遙》其三注。○「向他」句、謂一片深情向他白拋了。謾、這裏作徒、空、枉解。李白《述德兼陳情上哥舒大夫》、「衛青謾作大將軍、白起真成一豎子。」○「風流」二句、謂神女与楚王歡會之事已成過去、而今自己像瞿塘商客的妻子一樣、獨自徒守空房。唐詩人李益《江南曲》、「嫁得瞿塘客、朝朝誤妾期。早知潮有信、嫁与弄潮兒。」瞿塘、峽名、長江三峡之首、在今四川省奉節縣東十三里。

「今訳」画屏上的巫山映照在陽光裏、重疊的山巒捧出誘人的翠綠、我好似朝雲暮雨的神女、对巫山還那樣深含愛意。朝朝暮暮的幾多纏綿、深深的愛却白白地給了你。楚王神女的風流往事、早已成為遙遠的過去、如今的

我仍独守空寂、好像那瞿塘商客的妻。夢醒時只見山月照着山花、把殘灯的斜影拋給牆壁。

朱恒夫本

「注釈」○巫陽—巫山的南邊、此用楚王夢高唐神女事。宋玉〈高唐賦序〉、「神女去而辭曰、『妾在巫山之陽、高丘之阻。』」○楚神—即巫山神女。○風流—指男女之情事。王仁裕《開元天寶遺事》卷上、「長安有平康坊、妓女所居之地。京師俠少、萃集於此。兼每年新進士以紅箋名紙、遊謁其中、時人謂此坊為風流薮澤。」○瞿塘—瞿塘峽。長江三峽之一。李益〈江南曲〉、「嫁得瞿塘客、朝朝誤妾期。」○夢迴—夢醒。

「語訳」画屏上面有巫山、神女遠望淚漣漣。巫山南面青翠翠、想与楚王再歡會。楚王用情不專一、一会如火一会兒冰。神女給他很多情、巫山之上常行雲。古今情事千年隔、古今男人情都嗇。嫁個人兒不見影、空做丈夫的是瞿塘客。山月照山花、冷冷看我家。夢醒灯影斜、想郎在天涯。

「賞析」此詞写一閨婦对薄情夫君的怨恨。她的怨恨是由画屏上的画引起的。画的内容是重重疊疊的巫山、其神女峰聳立於群山之上。她由此画想到了神女与楚王的故事、並作這樣的思考、神女端立於山頭上、不論是刮風或下雨、她都在等待著楚王、可是楚王呢。「朝暮幾般心」、用情不專、使得神女行雲播雨的歡樂、久久地不能實現。因情事彷彿、女子由古人聯想到了自己、我不就是那空等而痴情的神女麼。郎不就是那用情不專的楚王麼。因巫山緊鄰瞿塘峽、於是詞人又化用李益〈江南曲〉中的詩句、以女子的口吻、怨恨地說郎君又是「朝朝誤妾期」的「瞿塘客」。「虛作」、怨極深之語。你是我的丈夫麼。可是終年不見你的人影、你是無室無家、舟行於瞿塘峽上的客商麼、可是你又和我有夫妻的名分。你豈不是一個空有虛名的丈夫。你害得我有人婦之名而無人婦之美。末兩句以灰冷的意境表現婦人此時的心情、山月無情、照著夜風中搖曳的山花。夢醒之後、衣架画屏、在灯光的照射下、斜影映壁。

錢国蓮本

〔注〕○巫陽—巫山之陽。用楚王高唐夢神女事。參閱第四五頁韋莊《歸国遥》（春欲暮）注。○瞿塘、峽名、長江三峽之首。○夢回—夢醒。

李保民本

〔注〕○巫陽—巫山之陽。○楚神句—用楚王高唐夢神女事。○朝暮兩句—謂楚王用情不專、神女不該以深情屬之。○瞿塘客—指商賈。瞿塘、三峽之一。

〔評〕《花間集》詞多写男女私情、此三首（青山注一六八、一六九、一七〇の三首を指す）《菩薩蛮》從行文中的巫陽、楚神、情漫深、妝台、行樂客、香闥、同心苒、問郎來看、似亦不例外、但偏偏有人從中看出了截然不同的內涵。近人俞陛雲《五代詞選釈》云、「晚唐五代之際、神州雲擾、憂時之彦、陸沈其間、既讜論之不容、藉俳語以自晦、其心良苦。牛松卿《菩薩蛮》詞及《更漏子》乃感士之不遇、兼懷君国。此三詞哀思綺恨、殆亦同之。」倒也見仁見智。

何を歌ったものとしているか

本詞に関しても、○三九南歌子と同様、意見が分かれる。第一は、不実な男に対する女の嘆きを歌ったとするものである。沈祥源本は、「夢後女主人公又認為男子情意不可捉摸、行踪無定、如今、自己不可虚許了瞿塘客、這些都從側面反映了女子心靈的創傷」と言つて、歌の女主人公が、夢から醒めた後、行方定めぬ男の心がつかめず、瞿塘の客に身を許すべきではなかったと後悔している歌としている。この解釈は、華連圃本（華鍾彦本）が「瞿塘」の語に付した注記、「李益江南曲『嫁得瞿塘賈、朝朝誤妾期』」に発想を得たものと考えられる。とすれば、

沈祥源本が言う「瞿塘客」は瞿塘の客商を意味するに違いない。それは、房開江本が、「今自己像瞿塘商客的妻子一様、独自徒守空房。唐詩人李益《江南曲》、『嫁得瞿塘客、朝朝誤妾期。早知潮有信、嫁与弄潮兒。』」と言つて、歌中の女主人公を、瞿塘の旅商人の妻のようなものと捉えているのと同じである。沈祥源本と房開江本とでは、旅商人の妻と、旅商人の妻のようなものとの違いはあるにしても、男に顧みられない女の嘆きを歌つたものとしている点では一致している。朱恒夫本も同様の解釈を採り、「此詞写一閨婦对薄情夫君的怨恨。」と言つている。華連圃本（華鍾彦本）が、「瞿塘」の注記として李益の江南曲を引いているのは、この詞を男に見捨てられた女の嘆きを歌つたものとする考えがあつたからと思われる。それは前段末句に対する、「其心易式、故不宜以深情相向也」（楚王は心変わりし易いので、真心から接しないほうがよい）という説明の言葉から明らかである。李保民本は、「《花間集》詞多写男女私情、此三首《菩薩蛮》従行文中的巫陽、楚神、情漫深、妝台、行樂客、香闌、同心苒、問郎来看、似亦不例外、但偏偏有人從中看出了截然不同的内涵。近人俞陛雲《五代詞選釈》云、『晚唐五代之際、神州雲擾、憂時之彦、陸沈其間、既讜論之不容、藉俳語以自晦、其心良苦。牛松卿《菩薩蛮》詞及《更漏子》乃感士之不遇、兼懷君国此三詞哀思綺恨、殆亦同之。』倒也見仁見智」と述べ、男女の私情を歌つたものと捉えているが、沈祥源本や房開江本、朱恒夫本のように明確に示されていないばかりか、時運に恵まれぬ「士之不遇」を歌つたものとする俞陛雲の見解を引き、暗にこの見解に賛意を示している。果して、本詞をこのような内容を歌つたものとしてよいのかどうか、以下、先の南歌子に倣つて、句毎に検討を進めて行くことにする。

(1) 「画屏重疊巫陽翠」について

屏風に巫山が青々と描かれていることを言ったものであるが、「重畳」は折り広げられた屏風を指すものではなく、青々とした山が重なり連なって描かれていることを言ったものである。「巫陽」は続く第二句で明示されるように、楚の懷王と巫山の神女の記事に関わる山である。

(2) 「楚神尚有行雲意」について

絵屏風には雲のかかる巫山が描かれていて、巫山の神女は今もなお楚の懷王に好意を懐き交情の思いを寄せていると、歌中の主人公が、屏風絵から触発された感慨を言ったものである。

(3) 「朝暮幾般心」について

楚の懷王は、夢の中で巫山の神女と契りを交わした。巫山の神女は別れぎわに、「私は巫山の陽、高く険しいところにおり、朝には雲となり、暮れには雨となつて、朝な朝な夕な夕なに、陽台の下におります」と言い残して去つていったという故事を踏まえたものである。もちろん、これは巫山の峰に今も朝夕に雲がかかり雨の降るさまを、巫山の神女が楚王に思いをかけていると捉えたものである。「幾般心」は種々な心遣い、すなわち、朝夕に雲となり雨となつてゐることを指す。

(4) 「向他情謾深」について

華連圃本（華鍾彦本）は、前述のように、この句を、楚王の心は変わりやすいので、楚王に対して真心から接しないほうがよいという意味に解している。沈祥源本は、この句については何も言っていないが、作品全体の理解の仕方からして、同様の見解を採っていたことは明らかである。房開江本も、「一片深情向他白抛了」（胸一杯の真心をいたずらに捧げてしまった）と、同じ解釈を下している。その点、朱恒夫本の解釈もまた変わりない。この句に対する注はつけていないが、「楚王用情不專一、一会如火一会兒氷」（楚王は心に実がなく、火のように熱かったか

と思うとまた氷のように冷たく」と訳している。沈祥源本以下のこうした解釈はいずれも華連圃本の解釈を踏襲したものと言つてよい。こうした解釈がとられる背景には、先の「瞿塘客」を瞿塘の旅商人とする理解が働いていることは言うまでもない。しかし、この句をこのように受け止めてよいのであろうか。実はこの句は、かつて情を交わした楚王は、遙か遠い昔に世を去つて今はなく、巫山の神女がいくら心をはたらかせて、朝夕に雲となり雨となつて巫山に現れても、もはや楚王に会うことは叶わず、その心遣いは徒勞に終わつてしまうことを言つたものなのである。

(5) 「風流今古隔」について

これは楚王と巫山の神女の風流事は、今では遠い昔のこととなつてしまったことを言つたものである。と、同時に、今の世では、もう楚王と巫山の神女のような風流事は、起こりうべくもないという意を含む。それを示すのが次句である。

(6) 「虚作瞿塘客」について

すでに見たように、多くの注釈書が、この句を李益の江南曲に結び付けて解釈を下している。例えば房開江本は、前の「風流」の句と一つにして、「神女与楚王歡会之事已成過去、而今自己像瞿塘商客的妻子一樣、独自徒守空房」（神女と楚王の良き出会いはもう昔のこととなり、今の私は、瞿塘の旅商人の妻のように、独り空閨を守っている）と解している。朱恒夫本も同じ立場に立つて解釈していることは、「嫁個人兒不見影、空做丈夫的是瞿塘客」の訳文や、「詞人又化用李益（江南曲）中的詩句、以女子的口吻、怨恨地說郎君又是『朝朝誤妾期』的『瞿塘客』。『虚作』、怨極深之語。你是我的丈夫麼。可是終年不見你的人影、你是無室無家、舟行於瞿塘峽上的客商麼、可是你又和我有夫妻的名分。你豈不是一個空有虚名的丈夫。你害得我有人婦之名而無人婦之美」の評語に見るとおりで

ある。しかし、この句を、歌の主人公を女と設定した上で、その女が嫁いだ男としたり、名ばかりの夫となったのは塘客の商人とするのは、いかにも持つて回った言い方で素直な読みとは言えない。ここは、そうではなくて、歌の主人公は、今、旅人として瞿塘に滞在しているが、自分にとつては、その上の楚王かみのように神女と結ばれる（良き女にめぐり合う）こともなく、ただの旅人として、空しくここにいるということを行ったものなのである。

(7) 「山月照山花」について

この句の表面的な意味については、ほとんど問題はない。夢から醒めて外を見ると、山の上の月が山に咲く花を照らしていたというものである。ただし、この言葉の裏には、作中の主人公の深い感慨がこめられているが、それが何であるかは明らかでない。おそらくは、これまで過ごしてきた人生を振り返つてのものである。

(8) 「夢迴灯影斜」について

此の句もほとんど問題はない。事象の発生順からすれば、夢から醒めると火影が斜めに照らし、外を見ると、「山月照山花」であつたところであるが、ここは、時間の流れを逆にした配列になっている。

まとめ

これまで述べてきたことをまとめると、この菩薩蛮は、瞿塘に宿をとつた旅人が、室内に設えられた屏風に、土地の故事に関わる巫山の絵が描かれているのを見て、昔の楚王のように喜ばしい神女との出会いもなく、空しくただの旅人として今ここにいるという感慨を歌つた詞ということになる。これならば、屈折した解釈を必要とせず、始めから終わりまで、すつきりと文意がとおり、内容も極めて明白になる。これにもとづいた拙訳を以下に示す。

絵屏風には畳なわる青き巫陽の山々、楚の女神は今もお楚王を慕い、朝な夕なに雲となり雨となり巫陽の峰にかかるが、楚王には会えずいたずらに思いを寄せるだけ。楚王と神女の風流ごとは今は遠い昔のこと、私はよき女おみなとの出会いもない空しき瞿塘の旅人。山の花照らす山の月、夢の覚むれば火影斜めに。